

序文

この序文を書くにあたって、いささか緊張している。

そうこれは、作品を「ここで終わり」とするときの感覚に近い。序文とは、およそ最後に書かれて最初に読まれるという、きわめてパラドキシカルな位置を本のなかで占めるものであり、満身創痍で描いてきた龍の絵の最後の最後に、点晴てんせいを入れるようなものかもしれない。

ピリオドを打つこと。作品に閉域を与えること。これは本書の重要な主題のひとつである。

近年の芸術において、「開かれること」は大いに言祝がれてきた。美術館やギャラリーといった空間の外へ出て、地域や社会問題、政治的問題へと向かうこと。芸術はいま、その「外」にあるものにかつてなく関心を寄せている。

そうした「開かれた」芸術において作品は、ある種の実践プラクティスや企画プロジェクトとしての性格を強めていく。裏を返せば、作品はそれ自体として

のみ見られるべきではなく、それにまつわる社会的・歴史的な文脈を踏まえた上でようやく理解しうるものとなっていく。しばしば現代美術がわかりにくいと言われる所以でもあるだろう。

民藝運動の提唱者として知られる柳宗悦は、自らが創設した日本民藝館での展示に関して、来館者からしばしば「説明文が足りない」と不満を言われたそうである。だが柳は、返す刀で次のように言う。

多くの人々は知識を得てはじめて見ることができると考えがちだが、それは違う。説明文をつけると、モノを見る目は認識に縛られてしまうのであって、そうした知的な認識とは異なる見ることの力を身につけることが重要である。博物館などで熱心に説明書きのメモを取っているような人ほど、ほとんどモノを見ることなく、また次の説明文へと向かってしまう。柳はこうした事態を、次のように表現した――「事に執して「物」に疎くなる、と」[↓]。はたしてこの言葉は、現代の芸術について考える上でも、ひとつの示唆となりうるだろうか。

モノはいま、どこにあるのか。本書は書き下ろしを中心に、現代において作品とは何か、制作とは何か、という芸術をめぐる根本的な問いについて考えたものだ。

書き下ろしでは、アーレントの「仕事」概念をひとつの手がかりとして、現代の芸術の状況とつき合わせながら、私たちにとって「モノ」とは何か、またモノとしての作品は、いかなるしかたで社会的なものとの関係をとり結ぶのかについて検討した。議論の道筋を平明に示すことを重視し、細かなニュアンス

は注で補うよう心がけたので、それぞれの関心に応じて派生的、多方向的に考えを進める一助としていただければと思う。

続いて、書き下ろしの内容をより広い視点で捉えたり、部分的に深く掘り下げたりできるテキストをこれまで発表した論考のなかから掲載した。まずは書き下ろしで本書の方向を掴んだ上で、各論考へと進んでいただければ幸いである。

本書は現代美術――いまふうに言うところの現代アート――の入門書の類いではない。芸術文化の最新情報を得たり、キーワードに幅広く触れるための本はすでにある。

本書は、芸術について根本的に考えなおしてみたい、もう一步踏み込んで考えたいという人に向けたものだ。わかったつもりにさせるだけの情報は記号として消費され、決して読む者を変化させはしない。読むという行為を通じて、その内容がより身体的に消化されることこそが、本書の志向するところである。予備知識がなくとも丁寧に読み進めてさえもらえれば、読み終えたときには、芸術文化について読者自身が自らの歩みを始めていくための具体的な足場が得られるのではないかと思う。

読むうちに視点が変化し、芸術との出会いなおしへとつながっていく――本書は、芸術文化をめぐるあなたのパースペクティブの変化へと誘うものである。

さあ、失われたモノへとむかう道を歩んでゆこう。

↓
柳宗悦『柳宗悦全集16』筑摩書房、一九八二年、二九〇頁。